

P2-065

見逃されやすい歯の萌出不全

高橋 昌司

たかはしキッズデンタル

成長期の子どもたちを対象とする歯科臨床において、歯の萌出の異常を持つ子どもに遭遇することが多々ある。それらは様々な部位や歯種において起こり、様々な原因に由来する。そのため求められる治療法や開始時期も異なる。わが国では、口腔の成長発育変化を評価する機会として歯科検診が、地域や教育機関において一定期間に一度行われている。そして大多数の子どもたちが健康な永久歯咬合の獲得を目標にスクリーニングを受けている。しかし、今回供覧する症例は、適正な時期に乳歯の脱落や後続永久歯の萌出が行われず、数回にわたる学校検診でも指摘を受けていなかった。成長期に求められる医療とは、歯科に限らず、適正な時期に適正な処置を、最小限の介入をもって行われることが望ましいと考えられるが、歯の萌出誘導についても同様で、適正な時期、「旬」がありそれを見定めることが、治療結果や侵襲の大きさを左右すると考えられる。また特に成長期において異常は時間の経過とともに範囲拡大や重篤化することも多く、早期の発見が最大の予防と考えられる。今回は以下の4症例について供覧し、治療結果および若干の考察を加え発表する予定である。[症例1] 初診時年齢11歳8か月の男児主訴：前歯が出てこない既往歴・家族歴：ともに特記事項なし口腔内所見：上顎右側乳中切歯晚期残存、上顎右側中切歯未萌出[症例2] 初診時年齢10歳11か月の男児主訴：前歯と右上の糸切り歯がはえない既往歴：上顎右側の歯に受傷歴口腔内所見：上顎右側乳中切歯晚期残存、上顎右側中切歯および犬歯未萌出[症例3] 初診時年齢8歳11か月の男児主訴：受け口が気になる、前歯がはえない既往歴：上顎左側前歯は癒合歯であった、他院で抜去した口腔内所見：上顎右側中切歯・側切歯未萌出、前歯部反対咬合、下顎前歯部過萌出[症例4] 初診時年齢12歳0か月の女児主訴：はえ換わりが順調か知りたい、かみ合わせが気になる既往歴：上顎右側乳犬歯外傷受傷歴あり口腔内所見：上顎右側乳犬歯晚期残存・歯冠部変色、上顎左側側切歯動揺

P2-066

北海道某市におけるフッ化物洗口実施後の現状と今後の課題

福田 敦史、広瀬 弥奈

北海道医療大学 歯学部 口腔構造・機能発育学系
小児歯科学分野

【目的】

平成22年度における北海道某市（以下某市）3歳児のう蝕有病者率は32.9%と道内平均25.7%よりも高く、近隣市町村と比較して最も高かった。そこで某市は北海道歯・口腔の健康づくり8020推進条例の施行を契機に、本学歯学部関係者、道職員を交えて準備を続け、平成25年度から市内の幼稚園、保育園でフッ化物洗口を開始した。しかし本事業の実施にあたり、当初は幼稚園・保育園の職員から本事業に対する理解と合意を得ることに困難な状況が生じた。

今回、某市におけるフッ化物洗口事業実施までの経過と現状を報告する。

【方法】

某市では、平成24年4月からフッ化物洗口事業実施に向けた検討会を設置し、同年7月に実施計画を策定した。われわれは某市からの依頼に基づき、同年8月から各幼稚園・保育園の職員を対象とした説明会および同年10月から保護者を対象とした説明会にてフッ化物洗口の有用性、必要性について説明した。フッ化物洗口実施後は新たにフッ化物洗口の対象となる幼児の保護者を対象に説明会を実施している。また行政からも各幼稚園、保育園の園長らにフッ化物洗口に関する説明を行っている。

【結果および考察】

平成27年度における某市内の幼稚園・保育園17か所のうち、フッ化物洗口を実施しているのは、幼稚園3か所、保育園7か所の計10か所（実施率58.8%）であった。これはフッ化物洗口を初めて実施した平成25年度実績と同じであった。また、平成27年度の対象となる幼児の参加割合は88.8%で、これは平成25年度実績の89.4%と比較してほぼ横ばいであった。

幼稚園・保育園の職員と折り合いをつけるのにより多くの時間と労力を要した状況を考えると、約1年間の準備期間を経て約9割の幼児がフッ化物洗口に参加している現状から、専門家が科学的に正しい情報を提供し続けることの重要性が示唆された。しかし、フッ化物洗口を更に普及していくには科学的に正しい情報を提供するだけでは限界があると考えられた。フッ化物洗口を普及するためには施設ごとの状況を理解した上で、行政と専門家が一体となって施設が実施できるようサポートをしていく必要があると思われる。